

批評の二元論的構造を脱構築する—朝鮮の日本語作家金史良をめぐる

Deconstructing a Dualistic Structure of Criticism—Over Korean Japanese Writer Shiliang Kin

朴 銀姫

Yinji Piao

はじめに

1910 年の日韓併合以来、日本は着々と朝鮮への植民地政策を推進してきた。ほぼ半世紀に亘って行なわれた日本による朝鮮支配には、過去の一エピソードとして見過ごすことのできない重大な意味が孕まれている。すなわち、日本の植民地支配は、近現代の朝鮮半島の文化形成に決定的な影響を及ぼしたのである。

特に、今日の韓国文化の大きな部分は、過去の植民地の遺産を清算し、新たな国民文化を樹立しようとする共同体の集団的欲望に囚われている。2009 年 11 月、韓国の民族問題研究所と親日人名辞典編纂委員会は 8 年間の編纂作業を終え、「親日人名辞典発刊報告大会」を開いて『親日人名辞典』を公開した。総数 3 冊、3000 頁に達するこの辞典は、民族問題研究所が編纂する「親日問題研究叢書」の人名編で、日本帝国植民統治と戦争に協力した人物 4370 人余りの主要な親日的行為や解放以後の行跡などを紹介している。つまり、日本による植民地被支配の経験は、現在においてもなお、単なる克服すべき、清算すべき過去の記憶ではない。この記憶は、進行形であると。同時に、未来形でもある。

周知の通り、現代韓国では「親日」＝「売国」、「反日」＝「愛国」という分断が新たな国民国家建設にあたってのスローガンとしてしばしば登場してきた。それは、親日派を排除して民族国家の正統性を樹立するという目的から発するものであった。しかし、このような動きに抗する内部からの指摘もあった。つまり、植民地的近代の認識をめぐる、「植民地近代化＝経済発展¹⁾」を認める若手の研究者が増えてきている。従って、親日派批判の言説は、「民主化を遂行するにあたっての政治的困難を克服し、社会の既得権を解体するためのヘゲモニー的効果を生み出している²⁾」という指摘もある。このような対立は、植民地体制と近代性の関連をめぐる論争にまで至っている³⁾。

一例として取り上げられるのが、鉄道をめぐる論争である。日本から移植された鉄道は、日本側からすれば、朝鮮半島の軍事的占領や経済的搾取、および中国大陆進出の陸上運送を円滑化させるために設置された装置に他ならなかった。しかし韓国にとっては、近代化

¹⁾ 安秉直「韓国近現代史研究の新しいパラタイム」『創作と批評』98 号、1997 年 12 月、52 頁。

²⁾ 趙寛子『植民地朝鮮／帝国日本の文化連環』有志舎、2007 年、69 頁。

³⁾ 松本武祝「朝鮮における『植民地的近代』に関する近年の研究動向—論点の整理と再構成の試み」(『アジア経済』43 巻 9 号、2002 年 9 月)では、近年の研究動向が三つの枠組み(①植民地期と解放後の近代を連続的にとらえること、②日常生活のレベルでの権力作用を分析すること、③民族主義言説のヘゲモニー的効果を批判的に相対化すること)によって要約されている。

と植民地化への流れの中で、二つの相対立する集団意識を作り出す結果となっている。つまり、一方は、被支配と搾取の状況乗り越え、新たな未来を切り開く近代文明の象徴として鉄道を認識したのである。しかし、他方では、支配者の暴力や搾取を強化し、朝鮮半島の土着文化の価値を否定する契機として認識されてきた⁴。このような近代化と植民地化をめぐる内部論争は、韓国文化の自己分裂もしくは自己統合を表面化させる言論装置に他ならない。

朝鮮の思想史からみれば、近代性は朝鮮王朝後期の実学思想にその萌芽を求めることができる。朝鮮の実学は、孔孟の学や朱子学など既存儒学の伝統から部分的に離脱し、人倫中心主義や中華中心主義からの脱皮という傾向を有していた。そしてその過程で、民族の主体性が自覚されはじめた。ただ、実学思想で論じられた個体主義は、民族主義の次元にとどまるもので、近代性の一つの要素である個人主義までには至らなかった⁵。

一九世紀末の開港期にいたって、封建支配層の中から文明化の必要を痛感する知識人が登場しはじめた。開化派の知識人は、日本や欧米列強を通じて近代性の獲得に努めようとした。このような近代性は、封建的胎内から自生した近代性が、西洋的近代性と競合し、影響しあいながら形成されたものである。しかし、そうした知識人の文明化への努力はやがて日本の朝鮮侵出の強化によって次第に変化していった。

初期の知識人の思想では、「文明」とともに「抗日」が大きな比重をもつようになり、国民主権・立憲主義にもとづく近代国家が志向されるようになっていった。しかし、戦争末期にいたって、知識人内部には両極化の傾向が現われた。後世の批評によれば、「親日」と「抵抗」という二項対立的な枠組みとしてまとめることができる。その「親日」と評価されている知識人たちは、「民族主義や社会主義から脱して日本主義への道を⁶」主張していた。これらの知識人は、朝鮮の独立を不可能なものを見なした。従って、被植民者として差別を受けるより、日本臣民になって同等の待遇を求めようとした。言わば、「内鮮一体」の主旨をそのまま受け取り、実現しようとした。「親日」知識人たちは、差別を克服するために「他者化」を求めてきた。彼らにとって、「同化」はある意味での「解放」である。つまり、「親日」という行為が、日本帝国の強要というよりも多くは自発的な選択であったという可能性を排除することはできないだろう。

とすれば、植民地時代の文学作品を「親日文学」／「抵抗文学」という二元論的に分ける思考は危険性を孕んでいる。なぜなら、二分化された思考は、常にある種の利益や権力に再利用される危機に直面しているからである。実際、「協力」と「抵抗」は二律背反的なものというよりは、相互浸透的なものである。即ち、植民地朝鮮の文化空間には、支配者の文化価値を獲得しようとする志向性（協力）と、被支配者の土着文化に回帰しようとする志向性（抵抗）という、外見的には相反するかのように見えるが、内実的には共謀関係

⁴ 鄭百秀『コロニアリズムの超克』（草風館、2007年）を参照せよ。

⁵ 尹健次『ソウルで考えたこと－韓国の現代思想をめぐる』（平凡社、2003年）を参照せよ。

⁶ 金在勇他『親日文学の内的論理』力楽図書出版社、2003年、5頁。

にある複雑な心理傾向が常に共存していたのである。

一．批評の二元論的構造

本論の目的は、こうした批評の二項対立的な枠組みを脱構築することである。

まず、支配者の文化価値を内面化し、獲得しようとした被支配者が完全な同化を成しとげることが不可能である。すなわち、植民地朝鮮文化の内部には、支配者の価値の獲得に向かって歩んだことのない被支配者は一人も存在しなかった。同時に、支配者の価値を完全に獲得し、被支配の条件を乗り越えた被支配者も、存在しなかった。植民地的主体は、常に同化と差別が共存する、あるいは、協力と抵抗、親日と反日が共存する閉ざされた回路の中でしか発現しえなかったのである。

特に、植民地末期の暴力的な言語・文化同化政策に抵抗し、朝鮮語・朝鮮文化の優れた価値を主張した朝鮮の知識階層は、ほぼ全員と断言してもいいほど、日本留学経験者であるか、日本語・日本文化を媒体にする植民地高等教育機関での修学経験者であった⁷。こうした点からしても、植民地の朝鮮文化は、日本の支配を正当化する様々な植民地主義的価値を内面化して、それに従属しながら、被植民者自らの文化を主張するという主体の発現によって支えられていたことがわかる。

次に、植民地時代を生きた主体の主体性について考えてみよう。植民地的主体とは、二項対立的な視点に基づく、一般化された歴史認識では捉えることができない概念である。すなわち、被害と加害、協力と抵抗、あるいは親日と反日の狭間にあるものを見いだす作業こそが、植民地的主体の理解に必要なものとなるであろう。

植民地的主体にとっては、協力／抵抗の完全なる分離こそが幻想であったかもしれない。植民地的主体の経験を「内部」だとするならば、そのような歴史を認識している後世の視点は「外部」的なものであるだろう。つまり、歴史認識とは「外部」で事後的に構成されたものである。しかし、「外部」は常に既に「内部」に襞のように折り畳まれているというドゥルーズの主張のように、言語には既に歴史や社会が折り込まれているはずである。とするならば、植民地的主体の経験は過去の歴史事実だけではない。そのような記憶や経験は、常に言語化され、現前化されている。

従って、植民地的主体の位置を把握し、定めることよりも、当時の人々が被った主体変容のプロセスを明らかにすることが重要である。植民地朝鮮住民は、日本帝国の強要にどのように対応していたのだろうか。すなわち、植民地主義的体系を内面化し、それに従属していくか抵抗していくかといった、植民地的主体の成立プロセスこそが、現時点で問題化されなければならないことであるだろう。

結論から言えば、そのプロセスは、曖昧であり、決定不可能である。なぜだろうか。その理由は、対象化不可能であるにもかかわらず、その問題提起が不可避であるという植民

⁷ 鄭百秀、前掲書を参照せよ。

地文化研究の特徴にある。そこで、ここでは受容や拒否の間に、様々な形で引き裂かれていた被植民者の流動的で曖昧な主体性について主に論じてみようと思う。

具体的には、この時代を生きた朝鮮の日本語作家金史良を取り上げ、彼のテキスト分析を通じて二項対立的な批評を新たに考察することにする。

1. 「抵抗」と「親日」

金史良が登場する 1939 年頃の日本文壇では、農民文学、報告文学（戦争文学）、生産文学、地方文学などの社会文学の主張と、私小説を擁護する純文学の主張との対立が鮮明であった。従って、日本文学においてほとんど描かれることのなかった朝鮮人の民族感情を正面から取り扱っているということが、金史良の小説に注目する最大の眼目となっていた。

金史良は常に両面的な評価を受けている作家である。金史良を抵抗作家として取り上げているのは、主に日本側の研究者たちである。磯貝治良の『始原の光—在日朝鮮人文学論』（創樹社、1979）や川村湊の『生まれたらそこがふるさと—在日朝鮮人文学論』（平凡社、1999）などは、金史良を被植民地朝鮮の悲惨な暗黒面を描き出すことによって、日本帝国の植民地支配・圧政を暴きだした抵抗の民族作家として捉えている。

初期の作品である「光の中に」、「土城廊」、「天馬」、「草探し」などの小説は、日本語という宗主国語を逆手に使うことによって植民地朝鮮の悲惨な実状を広くアピールしたと評価されている。さらに、これらの作品は日本の研究者たちによって「抵抗文学」の一例として取り上げられている。しかし、「悲惨な実状」を描くことが必ずしも抵抗意識の反映とは言えないだろう。小説の中には抵抗する人物が描かれていない。また抵抗のメッセージも書かれていない。

無論、日本の文化的侵略や言語抹殺政策などが朝鮮の作家にどのような影響を与えたかをまず考えなければならないだろう。また、被圧迫民族側の作家としての苦悩や葛藤、母国（語）の読者を持ちながらも日本語で創作しなければならなかった越境作家としての金史良の文学的立場が一体どのようなものであったかも考慮しなければならない。

金史良にとって日本とは他者であり、日本語とは他者の言語である。従って、他者の言語を用いて他者に抵抗する越境作家としての金史良作品を内外両面から分析する必要がある。植民地的主体の現実的条件とは、支配者の文化を否定するとしても、あるいは、被支配者の土着文化を肯定するとしても、まずは支配者側が提供する文化を学習しなければならないということである。つまり、支配者の「もの」を用いて、支配者に対抗するということである。

金史良の初期作品の主人公たちは、常に民族アイデンティティを模索している。だが、言葉や文化や血縁の同質性を根拠とする民族アイデンティティが、本質的でも不変的でもない近代イデオロギーの産物に過ぎないとしたら、民族アイデンティティの模索はどう理解すべきなのか。一言で言えば、彼らの民族アイデンティティは、他者（帝国日本）によ

る抑圧と圧迫から生み出されたのである。

ここで注意すべきことは、抵抗民族の民族主義と抑圧する側の民族主義を同一視してはいけないということである。ある意味で、被抑圧民族の抵抗は民族主義の確立から始まるしかない。つまり、抵抗民族のナショナリズムは受動的に発生するのである。彼らにとって民族主義の確立は、生きる場を守るための必然的な行為である。

一方、韓国の批評家たちは金史良を親日作家として扱う傾向が強い。秋錫敏の論文「金史良における親日文学への傾斜—後期の作品を中心に」（『日語日文学』第20集、大韓日本語文学会、2003）や崔光錫の論文「金史良文学に見られる親日性研究」（『日語教育』第36集、韓国日本語教育学会、2006）などは、金史良文学を帝国日本に対する植民地朝鮮人の戦争協力文学、朝鮮青年支援兵入隊を督励するための政策文学の一例として捉えている。

韓国の場合、民族主義の過去と現在をつなぐキーワードは「親日」と「反日」である。植民地朝鮮を独立させたエネルギーとしての民族主義と、現在の日韓関係をはじめ国際関係を律する一原理としての民族主義は、時代の隔たりを超えて共存しているともいえる。つまり、「親日」と「反日」は国家主義と民族主義の狭間で歪んだ関係を繰り返さざるを得なかった。韓国が、国民国家として日本の植民地支配から独立を宣言してから半世紀以上経った今日、民族主義は韓国の人々の大多数を統一するものとなり得た。それは近代になって諸国から導入された多様な思想が、植民地時代以降、確実に根付くことはなかったからである。韓国の民族主義は歴史的必然ではなく、社会・歴史的産物である。自由主義の根をもつ西欧の進歩・保守と違い、韓国の保守・進歩は民族主義に過度に依存し、その力を発揮しているからである。

従って、韓国の強烈な民族主義は保守・進歩論争という思想的欠乏を生み出した。こうした二元論的な立場は、文学作品の批評にもっとも鮮明に表われている。金史良の作品は、「親日文学」でも「抵抗文学」でもない。それは「金史良文学」であるとしき言いようがないのである。次に、具体的なテキスト分析を試みながら、植民地的主体の決定不可能性について明らかにすることにしよう。

2. 二元論的批評を脱構築する

テキスト①

「僕、舞踊家になるんだよ」彼はいきなり明るい声で叫んだ。

「ほう」私は驚いて彼を見つめた。一時に彼の体が光彩を放ち出した様に思われた。「舞踊家になるのか」ふとこれは実に素晴らしい舞踊家になれるかも知れないぞと考えた。

「そうか」

「うん、僕、踊るのが好きだよ。だけど明るいところでは駄目だよ。舞踊は電気を消して暗い所でやるもんさ。先生は嫌いかい？」

「ううん、それはきっと素晴らしいことだろうな。そう見れば君は体も実にいいぜ」私は

夢想するように云った。

「先生も踊りがとても好きなんだ……」

私の目の前には、この異常な生れをもつ、傷めつけられ歪められて来た一人の少年が、舞台の上で脚を張り腕をのばして、渡り合う赤や青の様々な光を追いながら、光の中に踊りまくる像がちらついて見えた。私の全身はみずみずしい瑞々しい歓びと感激にあふれて来るのを感じた。彼も満足そうに微笑を浮かべながら私を見守った。

「先生だって踊りを作ったことがある位だよ。先生も暗い所で踊るのが好きなんだ。そう。これからは先生と一緒に踊りを稽古しよう。うまくなったらもっと偉い先生の所へ連れて行こうな」私は何も作りごとを並べているのではなかった。私も一時は舞踊家になろうと思って創作舞踊を試みた覚えさえあった。

「うん」彼の目は青い星のように輝いていた。

(そうだ、近い中に協会の傍のアパートにでも移って行こう。そこで一先ず二人きりになるんだ)と私は自分に云い聞かせるのだった。彼がどうこれからひょうへん豹変するかは知らない。寧ろ又私を立ち所に裏切るには違いない。だが頑なにこちこちといじけ固っていた気持を、ほんの少しでもほぐしかけて来たこの機会を、私は逃してはならないと思ったのだ。

どうしたものかその時二人は浮かれ浮かれて老木の間をぬけて弁天様の傍を通っていた。そこにもここにも昨夜の嵐の跡が残って、折れた枝が落ちかかったり雨に洗われた地面に所々わくら葉が落ちたりしていた。鳩の群が弁天様の屋根や五重の塔のまわりをにぎやかに飛び交っていた。灯籠の傍に出ると下の方に茂みの合間を通して不忍池が見渡される。それは鏡をのべたように夕陽に照り返り時々ぎらぎらと金色に光ってみえた。五つ六つボートが浮んでいた。池に渡した石橋のですりには多勢の人々がもたれて水面をながめている。何んだか軽い霧が立ちこめはじめてるように思われた。もうだんだんと夕暮になって来るのであろう。ゆるやかにそれが池をつたわってこちらの方へ次第にひろがって来るように感ぜられる。それにつれて二人の心はますます清澄なものにしずまって行くのであった。

(『光の中に⁸』、講談社文芸文庫、1999年、53-54頁。下線は引用者による。)

主人公である混血少年は舞踊家になりたいという。少年が抱いているのは、単なる夢ではなく、調和的主体性へと向かう希望である。

少年の夢が舞踊家であるということは、どんな意味を持っているのであろうか。ここで、「舞踊」とは生産性を持つ自己実践的な行為として捉えられている。朝鮮人である母親を隠すという「母なるもの」への盲目的な拒否感を持つ少年が、舞踊家になる夢を持ってい

⁸ 「光の中に」は1939年、保高德蔵主宰の同人誌「文芸首都」に掲載。第10回芥川賞候補作品となる。日本人と朝鮮人の両方の血統を共有する少年山田春雄と、日本名と朝鮮名の間に引き裂かれている青年南を登場させ、個々人の世界への「内鮮一体」の関与を観察している小説である。

る。つまり、少年の内面には無意識から発する外部への表現欲求が作用している。これは、根源的なものさえ隠さなければならない状況に対する少年の反抗でもある。従って、このような内的反抗は「舞踊」に対する少年の憧れ、夢として表出されている。「舞踊」とは、無言の身体芸術である。つまり、身体そのものによって内面を表わす行為である。ここで「舞踊」は言語の持つ暴力を回避するものとして機能している。

しかし、少年は「明るいところでは駄目だよ。舞踊は電気を消して暗い所でやるもんさ」とさらに言う。ここには、少年の「光」に対する拒絶を読み取ることができる。明るい所では踊らない舞踊家になりたがる少年にとって、「光」とは超越できない他者の世界であると言えるだろう。

近代日本は朝鮮を、対等の文化を持つ「他者」として認めていなかった。植民地帝国日本は、内なる「他者」の存在を否定し、同化・征服することに全力を傾注した。日中戦争の準備段階である 1930 年代半ばを境目に、日本の対朝鮮植民地支配政策は、戦時総動員体制の確立へと大きく変化していった。その段階の支配政策を示すものが、いわゆる「内鮮一体」というスローガンである。「内鮮一体」は、朝鮮民族が完全に日本に同化し、帰属することを要求した。同時に、朝鮮の伝統文化や価値観を放棄することも強要してきた。朝鮮語の廃止、創氏改名、神社参拝、徴兵制実施などの一連の政策が、このようなスローガンで行なわれていた。「内鮮一体」とは、一方的で無条件的な強要であり、暴力であった。「内」である日本と、「鮮」である朝鮮の平等の統合でないことは言うまでもない。「内」と「鮮」の「一体」とは、「朝鮮を支配、抑圧する日本の単一民族のイデオロギー的幻想⁹」に他ならなかった。つまり、「内鮮」の「一体」とは、支配と被支配の上下関係である。しかし、「他者性」の根幹たる言語の消去を敢行し、伝統文化の破壊として創氏改名を行なっても、「一体」を実現することはできなかった。

少年の言う「暗い所」という空間が、その超越できない「自己」の世界を意味している。つまり、少年にとって、明るい所とは「完全なる日本人」としての居場所である。しかし、それは乗り越えられない「他者」の世界である。混血少年の夢には、「自己」（朝鮮）を「他者」化（日本化）しようとするものの不可能性を見いだすことができる。朝鮮人（もしくは混血）は「他者」という視点からすれば、完全に「日本人」に同化することのできない「他者」の「他者」にすぎない。少年が「完全なる日本人」になることを主張すればするほど、「日本人」から排除される。従って、少年は排除されればされるほど「完全なる日本人」を希求する。ここからは、「同化＝排除」の責任は、個人の性格にあるものではなく、植民地という状況とそれを主導する国家権力のほうにあることが読み取られるであろう。

さらに少年にとって「光」とは、瞬間的に消えるものである。少年は、自分が朝鮮人になることを拒否すると同時に、「南」が朝鮮人にならないことも拒否している。この「光」は、朝鮮民族の主体性の確立を意味してはいない。それは従って、日本国民としての主体

⁹ 鄭百秀、前掲書、90 頁。

性の確立を意味してもいない。ここで「光」というのは、「一人の世界」に閉じ込められていた混血少年の外部に対する超越意識である。自己否定、自己非難を反復しながら歪められた主体性を示してきた少年は、「私」との出会いによって現実に向かう肯定的な思考を持つに至る。しかし、この「光」は明確に現われるものではなく、瞬間的で曖昧なものとして描かれている。これは明確な主体性の確立不可能性を意味すると同時にその流動性・可変性も示唆していると考えられる。

また「鏡をのべたように夕陽に照り返り時々ぎらぎらと金色に光ってみえた」、「何んだか軽い霧が立ちこめはじめてるように思われた」、「もうだんだんと夕暮になって来るのであろう」という描写には、「時間」の曖昧さ、及び「光」の瞬間性を見いだすことができる。

「夕陽」・「金色」・「霧」といった言葉によって、ここには微妙な変化が起こる曖昧な時間帯である夕暮が描き出されている。「夕暮」という、明るくもなければ暗くもない曖昧な時間の中から、主人公たちの解決できない葛藤が見えてくる。「夕暮」は、第一の時間でありつつ、第二の時間でもあり、同時に、第三の時間¹⁰でもありうる。

「生ける現在」における時間の総合である第一の時間は、エクリチュールとしての「夕暮」の時間である。1939年、金史良は「光の中に」によって本格的な作品活動を始めた。

「光の中に」は、私小説に近い。主人公である「南」は、帝国大学の朝鮮人である。実際、金史良も1936年に帝国大学に入学し、この小説が発表された1939年には在学中であった。この小説は、1939年の植民地状況を反映している。ここでいう「植民地状況」が、金史良にとっての状況であることは言うまでもない。つまり、経験そのものを指し示す「生ける現在」としての第一の時間は、能動的な総合である自我の土台として機能している。また、こうした総合は、自己の生成プロセスでもあった。

主人公「南」の自己生成のプロセスは、無限に反復する葛藤や矛盾のプロセスである。これは、金史良の自己生成のプロセスでもある。「南」は、S協会の中では「ミナミ」という日本名で呼ばれている。しかしこの呼び方について、「南」は内心非常に気にしている。そこに、「南」の潜在的な存在意識、朝鮮人としての主体性が作用しているからである。「ミナミ」という呼び方は、第一の時間内に働く「現実」的なものである。つまり、潜在的な存在が現実化する局面としての第一の時間は、瞬間である。しかしそれが、瞬間の反復の反復としての時間であるためには、受動的に総合されなければならない。第一の時間、現在、は、広がりを持った現在であり、有機的な過去と未来の総合である。

言葉は無形のものに形を与える。「夕暮」は、第一の時間の中においてはエクリチュールとして存在する。無形のものに対して言葉は形そのものになる。つまり、「夕暮」という言

¹⁰ ここでは、ジル・ドゥルーズの時間論を援用している。文献としては、『意味の論理学』（岡田弘他訳、法政大学出版局、1987年）、『差異と反復』（財津理訳、河出書房新社、1992年）、『千のプラトー』（宇野邦一他訳、河出書房新社、1994年）、『シネマ2 時間イメージ』（宇野邦一他訳、法政大学出版局、2006年）などを参考にした。ここで言う時間とは、根拠としての時間ではなく、根拠を解体する時間、差異の条件として要請される時間を意味している。

葉によって、「夕暮」という時間が現前化する。しかし、「夕暮」は瞬間的である。従って、瞬間としての現在（「夕暮」）は語ることができない。にもかかわらず、「夕暮」は語られている。つまり「書く行為」とは、過去の視点から瞬間的現在をあたかも未来の出来事として語ることである。既に過去でありながら、未来的なものとして現在の瞬間を捉える。言い換えるなら、植民地主体の言語化されている「現在」を、「夕暮」という曖昧な時間の中で描き出している。

とすれば、この現在を可能にするのは一体何であろうか。それは、差異を含む「純粹過去」を見いだす第二の時間である。この時間は、「現在」とその有機化を可能にするため、その背景に存在している過去のことである。ここで言う「現在」とは、現実的に存在することというより、内在的に存在することを指している。「生ける現在」は「純粹過去」と共存する。同時に、その共存が思考の調和を崩壊させ、不実なる不均衡としての未来を生産する。しかし「純粹過去」とは、言葉以前の過去である。つまり、無限な過去であり、言語化しきれない過去である。「生ける現在」（言葉）によって隠される「純粹過去」は、現われとしての「現在」を支える。とすれば、第二の時間内の「夕暮」とは、どのような形で存在するのだろうか。

語ることができない、従って知ることができない状況の中でのみ、出来事は出来る。つまり、この出来事こそが、「純粹過去」である。第二の時間内の「夕暮」は、言語化しきれない出来事である。もっと言えば、植民地主体の差異を含む過去の記憶である。この時の記憶（「夕暮」の曖昧さ）は「現実化」はされないが、出来事である潜在性の領域は過去という時間位相（第二の時間）において示される。有限な人間は、有限なものについてのみ語ることができる。有限を超える無限について、有限な人間の言葉は語ることができない。第二の時間である「夕暮」の中で、すべての出来事が起こっている。しかし、それは言葉としては存在しない。それは、第一の時間内の「夕暮」の中に潜んでいる。

また第三の時間は、経験不可能な経験の原型としてイマージュ化されている。「純粹過去（絶対的過去）」に接近できないとすれば、現在こそがその効果であり痕跡であるだろう。現在／現前は、「純粹過去」的なものに常に遅れている。

即ち、第三の時間内には、「アイデア」としての「夕暮」が存在する。さらに、「夕暮」の時間内では差異を含む読み手が流動的に動き回っている。その動きは、真の客観性を持ち、定立的な多様体として瞬間的に定着する。従って、「夕暮」をその「概念の同一性→否定性としての差異」というプロセスから断ち切り、「夕暮」本来の差異的＝微分的なものを復元し、そこから生じる差異を肯定せねばならない。なぜなら、それが差異を否定的なものへと変えてしまうからである。差異とは、諸事物間の差異ではなく、諸事物と諸関係との差異である¹¹。つまり、「夕暮」は第一の時間でありつつ、第二の時間、そして同時に第三の

¹¹ ドゥルーズは「表象＝再現前化」を批判する。諸事例や諸自我が「記憶」という能力によって、現在・過去・未来という時間に配置されることを、ドゥルーズは時間の第二の総合としての「記憶の能動的総合」と呼び、それが諸事例の表象＝再現前化の原理になるという。ドゥルーズにおける「思考しえないもの」は「同一性を解体するもの」である。これは『アンチ・オイディプス』では「分裂症」あ

時間でもありうるのだ。ただ、国家・民族・共同体の枠組みの中では第三の時間としての真の読みが不可能となる。それは、他の読みを無視できるような特権を握っている批評家たちは、イデオロギーに囚われない公平な主張をすることができなくなるからである。

テキスト②

鎮海というところは、仙境ともいふべきところで、空は澄み、海青く、畳々たる山は青々として風さえもかぐわしい。広い道の両側にふとい桜の木が立ち並び、その木蔭を三三五五と列をなして歩く海軍軍人の白い服装がこのうえもなく調和して、いつそう身が清められるような感じを引き起こす。

「海軍はやはり頼もしくて美しい」

こういう印象を、われわれはみな胸深く抱きとめた。

(金史良全集編集委員会『金史良全集』4、河出書房新社、1973年、117頁。下線は引用者による。)

テキスト③

美しく見えるこの水兵服ほど、帝国海軍の旺盛なる攻撃精神を表わしたものはあるまい。(中略)水兵服を身につけた水兵は、かれ自身すでにひとつの砲弾なのである。だが、ひとり海軍にとどまろうか、スパルタの三百の勇士はおろか、三百万、三千万、いや皇軍全体が、一億国民全体が、すべて肉弾となる固い覚悟をもっているのである。

(前掲書、123頁。下線は引用者による。)

金史良の後期の作品はほとんどがルポルタージュである。ルポルタージュ「海軍行」、「鷲馬万里」、「海が見える」、長編小説「海への歌」などは、朝鮮語による作品である。彼が「親日作家」として批判されるのも、これらの後期作品を発表してからである。金史良が民族主義作家と呼ばれるのは、強要された言語を逆手に取って厳しい状況下にあった植民地朝鮮の現実を描き、加害者の蛮行を告発したからである。しかし、太平洋戦争の末期に至っては、母国語(朝鮮語)による政策文学に加担せざるを得なくなったという韓国側の研究者たちの批判が高まっている。即ち、民族主義作家としての名声をもって文学に足を踏み出した金史良が、結局は日帝の政策文学への加担者という立場に変じたと見なされ、「親日文学」の一例として評価されてきたのである。しかし、後期の作品の背景はかなり複雑である。

1943年7月、「海軍特別志願兵令」が公布され、8月1日の施行開始により、朝鮮海軍特別志願兵制度が制定された。これに伴い、鎮海警備府にまず朝鮮総督府の海軍志願者訓練

るいは「器官なき身体」と呼ばれ、『千のプラトー』では「戦争機械」や「平滑空間」と呼ばれる。ドゥルーズは、それらの隠喩の差異を利用しながら、自己同一性を中心に築きあげられた体制を攻撃している。

所が設置された。朝鮮民衆への海軍に対する知識普及を徹底させるため、国民総力朝鮮連盟では、小説家、詩人、画家などを朝鮮の海軍関係学校などに派遣した。金史良もその一員として鎮海海軍訓練所に派遣された。後期の作品は、このような背景の中で書かれたものである。

とすれば、後期の作品は「政策文学」なのであろうか。

当時加えられた様々な制限（政策強迫）のため、朝鮮民衆の独立決起を描いた作品はほとんど出版することができなかった。思想界、文芸界への言論統制は朝鮮が日本に先行するかたちで進められた。また、金史良が北朝鮮出身であり、解放後に越北したという理由から、つまり朝鮮半島の南北分断や分断文学史に起因する諸制限から、金史良の後期作品には評価が与えられなかった。

文学作品とはすべて、二項対立的な分析方法では解釈できない境界線上にあるものとして捉えられる。つまり、唯一で単一のイデオロギー表現は不可能である。ダブル・バインドに追い込まれた植民地時代作家の作品が、後世の読み手によって極端に評価が分かれることの意義を問い質すことが重要である。金史良の作品においても、複数のイデオロギーが絡み合っていることは確かである。内鮮一体が強要された時代を生きた金史良の思想は、内鮮一体の現実を否定しようとする側面と、それに妥協しようとする側面を矛盾的に抱え込んでいる。このような現実対応の感覚は金史良の文学全般において自己矛盾、自己分裂的要素として現われ、親日と抵抗の両面性、人種差別主義など、複雑なイデオロギーとして言説化されている。

一例を上げてみよう。朝鮮語で書かれたものだが、金史良は『海への歌』を1943年12月から1944年10月まで『毎日新報』に連載していた。この小説は、1866年のシャーマン号の大同江侵入事件から第二次大戦勃発直後まで、ある島の一族の80年間の歴史を取り上げたものである。最後に、一族の後裔が海軍志願兵制度により航空兵となる場面がおかれているところから、金史良の転向を示す作品と見なされてきた。しかし、テキストを冷静に読めば分かることだが、このテキストは東亜侵略を行なう西洋に対して立ち上がる志士の一族の運命を辿るものであって、日本帝国主義を肯定しているとはいささか極端な判断と言わざるを得ない。しかも戦時下の新聞連載ということに伴う様々な制約の中で、金史良には自由な言動が保証されていなかったように思われる。彼は『海への歌』を連載後、「在支朝鮮出身学徒兵慰問団」に参加して中国へ派遣され、45年5月末延安地区に脱出した。

即ち、植民地期の朝鮮半島の政治、文化的状況からみれば、朝鮮文学に「反日文学」という抵抗文学は存在しえなかった。日本の朝鮮合併以来、朝鮮総督府の行政、司法、教育組織は、朝鮮半島を隅々まで効率的に支配したのである。それ故、植民地期の朝鮮文学を取り巻いていた環境、作品が生産・消費される環境は、植民地文化支配政策によって統制されていた。また、植民地期に公的に活動していた朝鮮人作家や知識人階層は、特に日中戦争以後の植民地末期には、植民地体制を維持しようとする支配権力に何らかの形で協力

的に関わるようになっていた。従って、植民地期に朝鮮文壇で発表された文学の中には、「親日」のカテゴリーに属しうる作品はかなりある反面、「抗日」的なものは極めて少ないのである。つまり、解放期の朝鮮文学は、「抵抗文学」を植民地期に存在した文学の中から取り出すのではなく、新たに再構築しなければならなかったということである¹²。

金史良は、自己の思想を潜在的な言葉として時間軸の上に書き記した。言うまでもなく、このプロセスを推し進めているのは、後世の読み手もしくは批評家たちである。つまり、「読む行為」（第三の時間内に存在）とは、過去と現在とが条件付ける未来に、起源としての「作品」が操作する模倣的創造として定着されるものに過ぎない。従って、第三の時間の中で生成する批評とは、起源を欠いた反復の行為である。その反復と自由なる「差異」（読み手の差異）とを遭遇させる動きの実践こそが、読む行為なのである。

すべての言語行為は、二次的痕跡のうえで働く。現前しているものは、二次的派生としてある限り、それ自体が既に過去の的である。「今—ここ」で経験しているすべてのことは、純粋に現在的であることはない。それ以前の何かの働きによって贈り届けられたものなのである。その限りで、現前するものは、既に現在的ではない。現前の経験の中には無限の過去が凝縮されているが、そこに凝縮されている過去の経験もまた二次的な痕跡である。

金史良の文学は、「抵抗文学」でも「親日文学」でもない。だが同時に、「抵抗文学」にも「親日文学」にもなり得る。さらに言うなら、現前する「金史良文学」ということになるであろう。また、「金史良文学」は、言語化しきれない差異ある過去を含む様々な関係性と直面している。従って、過去の反復である「金史良文学」を、現在の反復者である「批評」を通じて「現前化」しなければならないのだ。ここで言う「現在」とは、同時に過去でもあり、過去すべてと共存している。

おわりに

日本の金史良研究者のほとんどは、彼を「在日朝鮮人文学」の祖として扱っている。例えば、川村湊の『生まれたらそこがふるさと—在日朝鮮人文学論』（平凡社、1999）、磯貝治良の『在日文学論』（新幹社、2004）、鄭百秀の『コロニアリズムの超克』（草風館、2007）などの在日朝鮮人文学に関する著作では、金史良の文学から「在日朝鮮人文学」が始まったという主張が展開されている。また、『新日本文学』（2003年5・6月号）に掲載された「在日作家総覧」にも金史良の名前が載せられている。

しかし、本論では金史良の文学を「在日朝鮮人文学」としてではなく、「金史良文学」として研究しようとした。これらの先行研究に従っている限り、金史良は「在日」という言葉の持つ制限性から脱することができない。現在に至るまで、「在日」という概念をめぐる、様々な議論が行なわれてきた。「在日」という言葉には、被害者としての意識が強く、

¹² 鄭百秀、前掲書を参照せよ。

加害者に対する批判姿勢が内在している。テキストを読む際、このような被害者意識が批評家の内に潜んでいることは望ましくない。無論、在日作家はマイノリティとして、マジョリティより一層多く語ることが要請される。

ここで注目すべきことは、そのような語りもしくは発信した言葉にマジョリティがどこまで対応できるか、どこまでしか対応できないかということである。被害者意識だけを主張すると、逆にマジョリティによって自己流に解釈されるという危険を強いられる可能性もある。植民地主義の歴史の中で金史良の声は、「叫び」であったか、それとも「つぶやき」であったか。「叫び」にせよ、「つぶやき」にせよ、彼が「沈黙」ではなく、「発信」を選んだこと自体に研究の焦点を合わせなければならない。

また、金史良にとって「越境」は文学活動を行なうための手段でもあったと考えられる。彼は日本と中国両方で創作活動を行なった作家である。特に民族対立に起因する迫害により朝鮮解放後には一時期中国の義勇軍に加わったこともある。そこで従軍作家として主に朝鮮語での戦時記録文を書いた。2008 年 8 月、中国延辺作家協会は中国抗日戦争勝利 60 周年を迎え、「金史良抗日文学碑」を建てた。それにより金史良文学の抗日意識のみを強調し、抗日作家として英雄化することになったのだ。このような批評の中に、常にある集団の権力や欲望が潜んでいることは言うまでもないだろう。

本論は「歴史的」に書かれている。と同時に「想像的」に書かれた。両者を分けるのが可能であると信じること自体が幻想であるかもしれない。両者いずれの立場を選ぶかは自己の意志によって決定できることではない。なぜならそれは、常に既に他者との時間的關係性において決定されているからである。様々に言説化されつつある現在の批評を改めて真摯に読み直す必要がある。それは一言で言うなら、生成し続ける時間の中において「金史良文学」を読み直すことである。

参考文献

i. 日本語の著書

安宇植『金史良—その抵抗の生涯』岩波書店、1972 年

浅田彰『構造と力』勁草書房、1984 年

磯貝治良『〈在日〉文学論』新幹社、2004 年

岩崎稔・大川正彦・中野敏男・李孝徳『継続する植民地主義』青弓社、2005 年

川村湊『生まれたらそこがふるさと—在日朝鮮人文学論』平凡社、1999 年

金史良全集編集委員会『金史良全集』河出書房新社、1973 年

金史良『光の中に』講談社、1999 年

鄭暎恵他『差別と共生の社会学』岩波書店、1996 年

鄭百秀『コロニアリズムの超克』草風館、2007 年
外村大『在日朝鮮人社会の歴史学的研究』緑蔭書房、2007 年
庭田茂吉『現象学と見えないもの』晃洋書房、2001 年
橋川文三『ナショナリズム』紀伊國屋書店、2005 年
林哲・徐京植・趙景達編『二〇世紀を生きた朝鮮人』大和書房、1998 年
渡辺一民『「他者」としての朝鮮』岩波書店、2003 年

ii. 邦訳著書

アーネスト・ゲルナー『民族とナショナリズム』加藤節監訳、岩波書店、2000 年
ジル・ドゥルーズ『意味の論理学』岡田弘、宇波彰訳、法政大学出版局、1987 年
ジル・ドゥルーズ『差異と反復』財津理訳、河出書房新社、1992 年
ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ『千のプラトー』宇野邦一他訳、河出書房新社、1994 年
ジル・ドゥルーズ『シネマ 2 時間イメージ』宇野邦一他訳、法政大学出版局、2006 年

iii. 韓国語の著書

김재용 『식민주의와 비협력의 저항』역락, 2003 년
김재용 『김사랑 작품과 연구』역락, 2008 년
남원진 『남북한의 비평 연구』역락, 2004 년
윤대석 『식민지 국민문학론』역락, 2006 년
유임하 『근대성과 한국문학 연구』이회문화사, 2002 년
이상우 『문학비평의 이론과 실제』집문당, 1997 년
이화여대대학교 통일학연구원 『북한문학의 지형도』이화여자대학교출판부, 2008 년
추석민 『김사랑문학의 연구』제이앤씨, 2001 년